

柔軟なビジネスネットワークが企業の競争力の源泉

SAPPHIRE '07にみるエコシステムの未来

SAP最大のイベント「SAPPHIRE '07 MIYAZAKI SEAGAIA」が、10月28日から31日までの4日間、宮崎県のフェニックス・シーガイア・リゾートで開催された。「BUSINESS AT THE SPEED OF CHANGE ~変化の、さらにその先へ。次の一手を、じっくり語り合おう~」と題して、多くのユーザ企業や経営者が招かれた今回は、「変化」をキーワードにしたさまざまな企画やセッションが展開され、SAPの今後のビジョンを明確にするメッセージが発信された。

「これからの企業の成長には、知力のネットワーク、プロセスの連携・自動化によるビジネスのネットワーク、経営資源のネットワークの3つが不可欠だ」。公開プログラム初日の基調講演において、SAP AG 会長兼CEOのヘニング・カガーマンは約1,000人の聴衆にこう語りかけた。このことを裏付けるように、今回フェニックス・シーガイア・リゾートを貸し切って行われたSAPPHIRE '07の主旨は、過去、日本国内で開催されてきたイベントとは異なるものであった。

共催された2007 JSUG Conference、同じくJSUG会員企業の企画によるセッショントラック、来場者の課題に直接応える対話形式の展示ブース、この他にも企業戦略の専門家によるビジネススクールの開講など、さまざまな企画が展開され、まさにSAPPHIRE全体が、ユーザ、パートナー、その他多くのステークホルダーを含む「エコシステム」の強化に向けた、SAPのビジョンそのものを示していた。

カガーマンは、ITの視点からも「SAPの

ソリューションが今後、大規模企業/中規模企業を自在に連携し、変化するビジネスネットワークに柔軟なビジネスプロセス・プラットフォーム(BPP)となる」と語り、大規模企業に向けてはSAP Business Suiteの導



基調講演の中で、変化に柔軟なビジネスネットワークの重要性を強調したSAP AG 会長兼CEOのヘニング・カガーマン

入を推進するとともに、中堅・中小市場へもSAP Business All-in-One、SAP Business ByDesignの提案を強化していくなど、エンタープライズSOAの実現に向けた今後のロードマップを明らかにした。

こうしたSAPからのメッセージは、基調講演に先立って行われたSAPジャパン会長のロバート・エンスリン、SAPアメリカ&アジア・パシフィック・ジャパン(AAPJ)のプレジデント兼CEOのビル・マクダーモットの挨拶においても同様であった。エンスリンは、「顧客との情報共有、ビジネスネットワークは、これからますます重要になる」と、来場者とJSUG会員企業への感謝の意思を表明。またマクダーモットは、「米州におけるSAPの大きな成功には、ASUG(Americas' SAP Users' Group)の活動が大きな貢献を果たしている」として、1,300の教育セッションやオンデマンドラーニング、共催イベントなど、具体的な取り組みを紹介し、ビジネスの価値創造におけるSAPとユーザ企業とのパートナーシップの重要性を強調している。



シャープの「オンリーワン経営」を支える経営コックピットを公開

多くの企業経営者がゲストとして招かれたSAPPHIRE '07だが、中でもひととき印象的だったのが、基調講演で登壇したシャープ株式会社の代表取締役会長 町田勝彦氏だ。

同氏は、亀山工場で生産される液晶テレビ「AQUOS」を世界的なブランドに育て上げた「シャープのオンリーワン経営」について、「90年代後半に家電業界が冬の時代だった頃、シャープは多くの経営資源を、IC事業から液晶事業にシフトした。その当時、「2005年までに夢の壁掛けテレビを家庭に普及させる」と言ったとき、信じてくれる人は少なかった」と振り返り、「液晶事業に際しては、とにかく社内のベクトルをあわせることを徹底した。『人は石垣 人は城』。いろんな形の石、多様な人材を活かしてこそ、強い城を支えることができる」と、自身の組織運営術について持論を披露した。

また、世界54の生産・販売拠点にSAPシステムを展開して実践している「見える化」についても触れ、実際の経営コックピットを自社製の大型液晶ディスプレイで公開。商品別、事業部別、月別、地域別など、すべての状況がグラフィカルに表示され、リアルタイムに把握できると説明した。「大切なのは使い方。ここで把握した情報をもとに、現場とダイレクトにコミュニケーションすることが、組織にとっての大きな刺



写真左:シャープ会長の町田氏は、自社の経営コックピットを公開し、経営者としての独自のコミュニケーション手法について講演した。
写真右:パネルディスカッションに参加したオリンパス社長の菊川氏(中央)は、「Social IN(ソーシャル・イン)」という経営理念に基づく、スピード最優先、方針の徹底、リーダーの規律という3原則を紹介。

激になる」と、ITを効果的に活用した独自のコミュニケーション手法は、多くの聴衆の関心を集めていた。

イノベーションの創出に不可欠なスピーディな意思決定

企業の経営戦略という視点から展開されたのが、プログラム2日に行われたパネルディスカッションだ。オリンパス株式会社代表取締役社長の菊川剛氏、株式会社日経BP 取締役の酒井綱一郎氏、一橋大学大学院 国際企業戦略研究科 准教授の大園恵美氏の3者の参加による、「イノベーションの継続こそが競争力強化を実現する ~成長企業の経営戦略を探る~」と題した対談は、ITとは一歩離れた専門家の知見に接する貴重な機会だった。

冒頭で酒井氏は、イノベーションは技術革新とは限らない、イノベーションは単なる思い付きではなく、そこには組織的な活動がある、イノベーションは小さなことから始まるという、経営学の世界的な権威である故ビーター・ドラッカーの言葉を引用して、イノベーションの創出における組織活動の重要性を強調した。

これに対して菊川氏は、社内実践している「スピード最優先、方針の徹底、リーダーの規律」という3原則を紹介。「大切なのは、変化の先取り。オリンパスでは、社会と融合しながら新たな価値を提案する『Social IN(ソーシャル・イン)』という経営

理念のもとで、従業員の意欲を高めるイノベーションについて、経営トップと事業部門のリーダーシップを明確にしながらか判断している」と解説した。

また、イノベーションの「収益化」についても具体的な議論が行われた。酒井氏からは「新たな価値のコモディティ化を防ぎながら、ブランド価値を維持することがよくいわれるが、それだけではない。Suicaや電子マネーEdyで使われているFelica技術のように、あえてブランドを出さずにコモディティ化を推進することで、広く社会に浸透することもある」といった分析もなされていた。

*

SAPPHIRE '07で行われたさまざまな講演やセッションに共通するテーマは、やはり「変化への柔軟な対応」と「ビジネスネットワークの強化」だ。共催された2007 JSUG Conferenceのパネルディスカッションにおいても、独自のビジネスプロセスについての要望がユーザ企業からSAPに対して出されるなど、こうしたテーマをめぐる新たな動きが始まっていることがうかがえる。

エンタープライズSOAの実現に向けた具体的な道筋が拓かれつつある現在、SAPのエコシステムに参加する多くの関係者にとって、今回のSAPPHIRE '07は、ITを活用した新たなビジネスチャンスを見極める上での絶好の機会となったに違いない。